校長荒木規夫から保護者・生徒皆様へのメッセージ【不定期コラム№39】R4 12/23

「私の第一声㉖」

【雪の思い出】

昭和の時代、地球温暖化がそれほど深刻に報道されることもなく、大阪でも毎年１～２回、雪が積もることがありました。小学生の私も、雪が積もるのを楽しみにしていたことを覚えています。

朝、布団の中で目覚めると、なんだかいつもと違う感じがします。私には雪が積もったらわかる超能力があったのです。寒いので布団から出たくはないのですが、この感じ…。起き上がってカーテンを開けます。窓は水滴で曇っていて外は見えませんが、光に満ちてまばゆい感じです。ドキドキしながら窓を開けると、普段とは全く違う景色、銀世界です。自分の超能力に有頂天でしたが、今から考えれば、雪の乱反射による窓の明るさと、積雪による音の吸収が「いつもと違う感じ」の正体だったのでした。

「雪、積もってんで―！」家族に大声で知らせて回りながら、外へ出てみます。まずは、真っ白で平らな地面に、足跡をつけて遊びます。次に雪玉を作って的に見立てた木にぶつけたり、電線に積もった雪にあてて雪を降らせたりして楽しみます。最後は雪だるまです。光り輝くでっかい傑作の雪だるまを想定して作り始めます。まず手で固い小さな雪玉をつくります。それを地面に置いて、転がすことで雪をくっつけて、大きくしていきます。たくさん積もっているわけではないので、大きくすればするほど、土やほこりが混ざった雪玉になります。出来上がった傑作は、茶とグレーで薄汚れた、ヘンテコな雪だるまでした。家に持ち込もうとして当然怒られ、玄関先に大切に設置します。

いつもより早い時間に登校します。当時はあちこちに水たまりや溝があり、氷を見つけると、足を乗せて割れる感触を楽しみます。割れた氷を手で拾い上げます。薄い氷は理科の顕微鏡の時間に使うカバーガラスのように繊細ですぐ溶けます。分厚い氷は割れた窓ガラスの破片のようで美しいお宝です。分厚くて大きければ、レア度が高くなります。みんなに見せたくて、慎重に運びますが、学校に着くころには結局、溶けてしまいます。朝の傑作雪だるまも、家に帰るころには汚れた水となって玄関を汚しており、また母に怒られるのでした。

【学校行事の思い出】

堺市立赤坂台小学校では当時５・６年生で冬の金剛山に登りました。楽しい遠足ではなく「訓練」で、本格的な準備をして臨みます。全員、登山靴（キャラバンシューズ）とアイゼン（凍った道を登るための滑り止め）を準備します。ステンレスの軽アイゼンを買ってもらえない私は父親の赤黒くさびた６爪のアイゼンです。爪がごつくて歩きにくいし恥ずかしいので、使わずにすむことを祈りました。

冬山は寒く厚着で参加しますが、登山で汗をかき、そのままにしておくと風邪をひきやすい。でも山頂で服を脱いで汗を拭くのは寒いし恥ずかしい。速乾性下着も発汗発熱素材もない時代、あなたならどうしますか？　当時、私の周りでは手作りアイテムが流行していました。薄手のタオルを２枚、それぞれ２つ折りにして軽く縫い、15 ㎝ほどのゴムひも２本でつないで完成です。このアイテムは、上半身裸になり、ゴムひもの間に頭を通し、体の前と後ろに２つ折りタオルをぶら下げ、その上から下着を着て使います。汗をかいた後、下着の首元からゴムひもを掴んで引っこ抜き、汗にぬれたタオルを出す作戦です。

当日の朝、アイテムを身につけ、登山靴を履き、リュックにアイゼンと新聞紙で包んだ大きなおにぎりを入れて家を出ました。学校からバスで金剛山のふもとまで行き、そこから山頂に出発です。当時は長時間歩いた印象ですが、片道２時間ほどでしょう。階段もあれば鎖につかまってよじ登る崖もありました。土の道はやはり凍っていましたが、周りの視線など気にする余裕もなく、必死でアイゼンをつけ難所を乗り切り、山頂に着きました。大きな達成感を味わい、ふるまわれた豚汁と持ってきたおにぎりは最高に美味でした。

自慢のアイテムはどうなったかって？　体に汗で張り付いたタオルは自分ではなかなか抜くことができず、友だちに引っ張ってもらいました。「せ～の！」ブチッ！　ゴムが切れ、私と友達は後ろにひっくり返ってしまいました。アイテムは身につけたまま、帰宅しました…。

【不定期コラム№40】へつづく

第三中学校ホームページ では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/

見塚第三中学校ＨＰ